

# 歩行中の携帯電話操作とリスク補償の関係について

前川 梨紗

**【背景・目的】**スマートフォンの普及に伴って、歩行中にスマートフォンを操作する、いわゆる「歩きスマホ」による事故が増加している。歩行中における携帯電話操作の悪影響について明らかにされている。一方、危険の程度を下げるためにリスク補償が行われることも知られているが、十分には検討されていない。また、リスク認知がリスクテイキング行動に強く影響すると考えられるが、歩行中での携帯電話操作に対するリスク認知については明らかにされていない。従って、本研究では歩行中の携帯電話操作とリスク認知、リスク補償の関係について検討することを目的として、質問紙調査と実験を行った。

**【質問紙調査】**質問紙にて歩行中に携帯電話を操作する頻度、リスク認知、意図的なリスク補償について検討した。その結果、全く操作しない人と比較して操作頻度の高い人はリスク認知が低いことが示された。また、危険な場所での携帯電話操作をひかえる、足元や前方に気をつける、複雑な操作の内容を意図的に避けるといったリスク補償は行われず、歩行速度を遅くする、特定の操作内容を避けるというリスク補償が意図的に行われることが示された。但し、操作頻度の高い人は意図的なリスク補償を行っていない。質問紙調査の限界として、意図的なリスク補償と実際の行動が一致しない可能性などが挙げられる。

**【実験】**質問紙調査の限界を踏まえ、歩行中の携帯電話操作と実際のリスク補償、事故の危険との関係を検討するため、携帯電話を操作しながら障害物のある経路を歩行する実験を行った。操作の条件は統制条件、文字入力条件、ゲーム条件であった。リスク補償として歩行時間、障害物の回避方法、操作中止回数を測定し、事故の指標として障害物との衝突回数を測定した。実験の結果、文字入力条件、ゲーム条件は統制条件と比較して歩行速度が遅く、障害物の回避を慎重に行うというリスク補償を行っていることが示された。普段歩行中に携帯電話を「ほとんど操作しない」群において、文字入力条件の衝突回数は統制条件と比較して有意に多かった。操作頻度の低い人はリスク補償の行為自体に注意資源を多く必要とするため、周囲への注意が不十分となり、事故に遭遇しやすいことが示唆された。また、操作内容の負荷が高いゲーム条件では歩行速度ではなく、操作自体を中止するという別のリスク補償を取らなければ衝突の危険を回避できないことが示唆された。

**【総合論議】**本実験では、歩行環境の複雑さや操作内容の負荷の高さがコントロールされていたため、リスク補償によって事故の危険を回避できていた。しかし、歩行中の携帯電話操作に習熟していない場合、事故を回避できない可能性が示唆された。日常場面では歩行環境が複雑であり、操作内容の負荷の高さも様々であるため、習熟している場合でもリスク補償が十分に行われず事故の危険が増大する可能性が指摘される。従って、歩行中の携帯電話操作を抑制する対策を施す必要がある。質問紙調査により、頻繁に操作する人はリスク認知が低いことが示されたため、体験型の教育などリスク認知自体を向上させる安全教育の方法と効果を検討することが望まれる。(安全行動学)